

# 「われわれ」のアイランド

——日本と植民地朝鮮におけるアイランド文学の〈移動〉——

**【発表構成】**

1. 本論文の問題意識と目的	..... 1	5. 各章の概要	..... 7
2. 用語の定義	..... 3	6. 本論文全体の成果と今後の課題	.....21
3. 先行研究と本論文の特質	..... 3	7. 主要参考文献	.....22
4. 本論文の構成	..... 6		

**1. 本論文の問題意識と目的**


**1) 交差するふたつの帝国／植民地**

英本国と愛蘭との関係は、  
譬えて云えば、[...] 日本と  
朝鮮とのような関係であ  
る。



菊池寛  
(1888-1948)

われわれは悲惨な愛蘭人  
のように、過去の美しい  
詩歌、伝説は [...] 消滅  
していく形勢である。



金祐鎮（キム・ウジン 1897-1926）  
：早稲田大英文科卒。1920年に劇芸術協  
会を発足させ、翌年には全国巡回演劇団を  
主導、アイランドの劇作家ダンセイニ卿  
の『燦爛たる門』を翻案・演出。24年に  
バーナード・ショー論で卒論提出後、『李  
寧女』、『正午』、『もぐら詩人の幻滅』、『難  
破』などの戯曲を発表。

- ・鶴岡真弓「芥川龍之介の愛蘭土」（1998）：アイランドの文学的所有は朝鮮の領土化という思想と同じ透視法の上に横たわっていた。
- ・上野格「日本におけるアイランド学の歴史」（1975）：朝鮮植民地統治の最重要参考資料としてのアイランド。アイランド問題を論じながらたえず日本に思いをいたすことが、分野を問わず戦前の論述に共通する姿勢。

**2) 「愛蘭＝朝鮮」の図式が内包する問題点**

韓国の比較文学研究においても、「愛蘭＝朝鮮」という図式の下に朝鮮の人々がアイランドに思いを寄せたことは、植民地期朝鮮におけるアイランド文学（とりわけ、アイランドのナショナリスティックな文

化運動として誕生したアイルランド劇)の流行との関連でしばしば論じられてきた。しかし、そのような先行研究は、以下のふたつの問題点を露呈している。

①アイルランドと朝鮮との政治的な状況の類似性が、アイルランド文学の流行という現象を説明するための万能薬であるかのように使われてきた点

→ 日本におけるアイルランド劇の流行など、他のコンテクストが軽視される傾向。とりわけ、本論文で明らかにするように、アイルランド文学をめぐる言説において「愛蘭＝日本」の図式が同時に存在していたことを念頭に入れる際に、単純な二分法は見直されるべき。

②「われわれ朝鮮人」なるものを所与のものとして捉えがちである点。

→ アイルランドとの出会い自体が「われわれ朝鮮人」の構築とどのように関わっていたかの問題は看過される。しかし、「われわれ朝鮮人」なるものが、超歴史的なものとしてすでに存在していたはずはなく、「朝鮮人」と「アイルランド文学」の出会いを考察する際には、文学的な行為によって「われわれ朝鮮人」が作り上げられるにあたって、アイルランド文学がどのように機能したのかがまず問われなければならない。

#### ⇒ 本論文の目的

：帝国日本と植民地朝鮮を同時に視野に入れながら、アイルランド文学がどのような形で注目されていたかを詳細に検討し、アイルランド文学が「われわれ」の構築、つまり国民的アイデンティティの構築と関連して持ちえた意味や働きについて考察すること。

### 3) なぜアイルランドという他者に注目するのか

・国民的・民族的な同一性は超歴史的なものではなく、近代において「かれら」とのあいだの「対-形象化」(酒井直樹)によって作り上げられた。そして、その「かれら」として決定的な役割を果たしたのが、「西洋」である。

・その一方で、「日本」という自己が「西洋」という他者と同時に、「辺境」(福間良明:「〈近代文明〉」の位階構造において下位に位置するものとして認識され、日本という自画像を描くうえで、他者として表象された空間)であり、「具体的には「アイヌ」「沖縄」「朝鮮」「満州」「南方」等の名称で語られてきたもの」という他者との対照で表象されてきたことも忘れてはならない。

→ アイルランドは「西洋」でもあり「辺境」でもある両面的な他者。とりわけ文学の世界で、アイルランドとは簡単に一方に帰属させうる「かれら」ではなかった。

このように両面的な他者であるからこそ、アイルランドは「われわれ日本人」の構築と関連した研究において「西洋」としても、「辺境」としても、それほど注目されてこなかったのかも知れない。しかし、本論文ではあえてこうした両面的な他者を取り上げることで、これまであまり注目されてこなかった「われわれ日本人」の構築の諸場面に光を当てることができると期待する。さらに、帝国日本と植民地朝鮮を同時に取り上げる本論文においては、日本にとってアイルランドがどのような性質の他者であったのかと同じく、朝鮮にとってアイルランドがどのような性質の他者であり、どのように「われわれ朝鮮人」の構築に関わったかも、重要な問題となる。「西洋」だけではなく、「日本」という、もうひとつの「普遍」と向かい合いながら「われわれ」を構築しなければならなかった朝鮮の人々にとって、アイルランドがどのような他者として立ち現れたかについて、本論文は注目した。

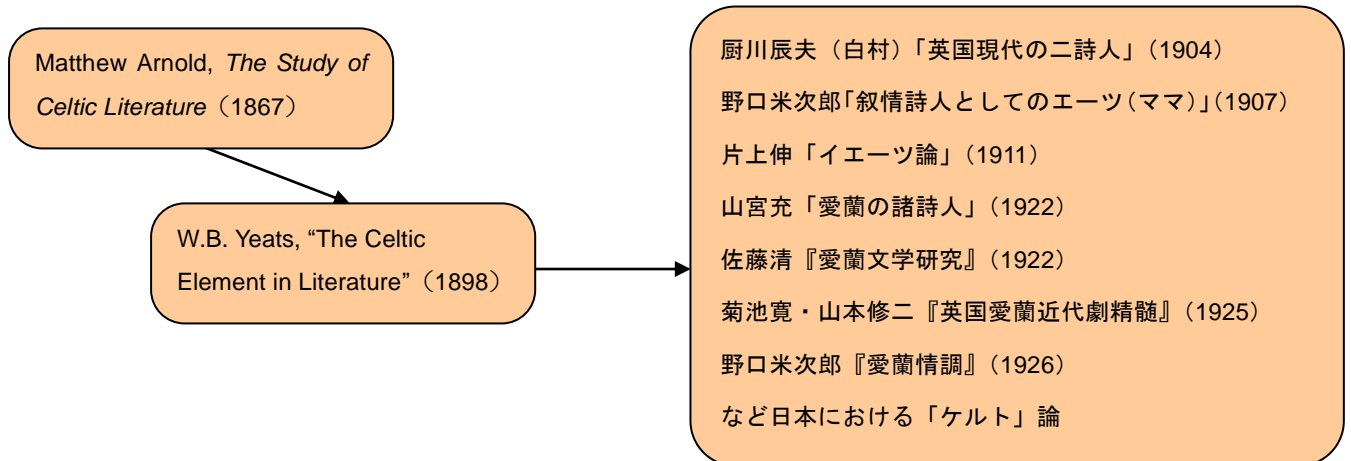
## 5. 各章の概要

### 1) 第1章 自画像の時代、「ケルト」という他者

#### —アーノルドの『ケルト文学研究』と日本の「ケルト」言説

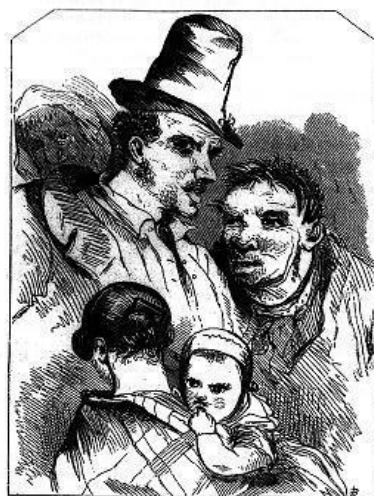
①目的：20世紀の初頭に日本で流通した「ケルト」言説を検討することで、当時の日本でなぜそれほどまでにアイルランド文学が注目されたのかという問題に対する答えを探ること。アーノルドのケルト文学論がそもそもエスノロジー（ethnology）として書かれたことに注目し、イギリスの「人種」的な他者としての「ケルト」が日本において担った役割は何であったのかを考察。

②題材：



左から、E・ルナン（彼の『ケルト民族の詩歌』はアーノルドの「ケルト」論に多大な影響を与えたとされる）、アーノルド、イエイツ

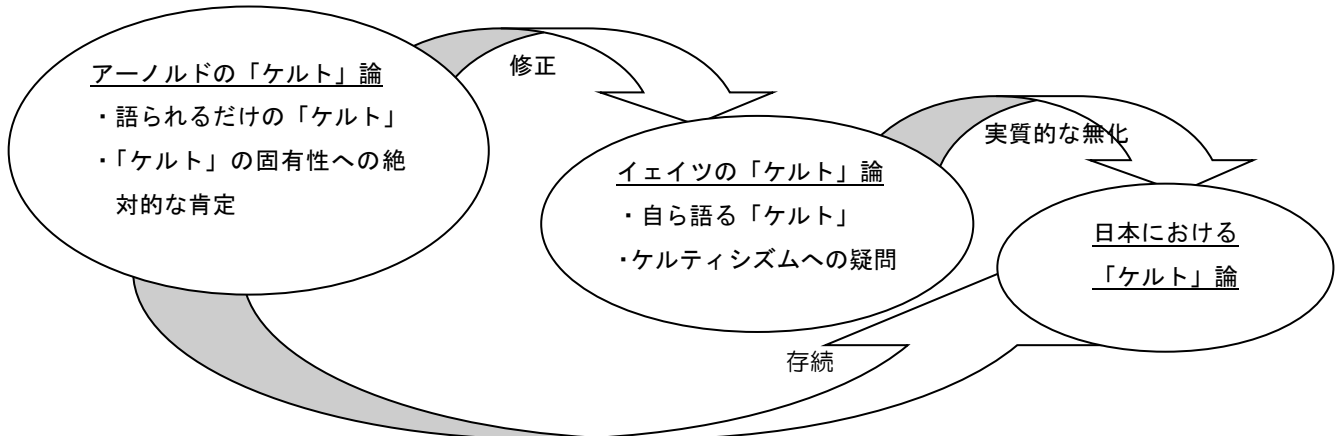
アーノルドの著作が発表された同時代のイングランドにおいて、「アングロ・サクソン」と対比され、「劣等な人種」として表象される「ケルト」



アングロ・チュトンを理想的な顔として、アイルランド人とイベリア人が「黒人」の子孫であるとする一九世紀中葉の文芸評論誌ハーバース・ウィークリーの挿絵。

③ 成果：

- A. イェイツによるアーノルド論の修正（自ら語る「ケルト」&ケルティシズムの修正）を検討することで、一見自然に見える、アーノルドの「ケルト」論から日本における「ケルト」言説への流れが、実はイェイツの修正を実質的に無化することによって可能となった。



- B. 日本における「ケルト」言説には、「血」を媒介としない、「民族性」による新たな「類縁性」を持ち出すことで、「科学」をもって「ケルト」を語る権利だけではなく、「ケルト」的である権利までを主張する動きがあった。→ アーノルド的な「ケルト」への眼差しを獲得。

文学上の愛蘭土復活は、人種と文学という小研究問題を与えたが、[...] 愛蘭土人で無くては、ケルチック古代精神を得ることが出来ぬと言う理は無い。

野口米次郎「叙情詩人としてのエーツ」『太陽』（1907年10月）



- C. 「ケルト」という他者がもてはやされたことを、日本人類学の動向（「われわれ日本民族」の自画像構築）と関連付けて、意義付け。この自画像構築の時代に、「ケルト」という他者は、ルナンやアーノルドにとってそうであったように、一方では「われわれ」の対極に配置され、他方ではその長所が「われわれ」に取り込まれることで「われわれ」の自画像の一部をなすべき存在として機能した。

ケルト民族は飽くまでも直観と情緒とを信じている。そしてその直観の働きは、往々にして理知の達し得ない深いところに達するのである。  
[...] 近頃の日本人はいろいろ訳の分からぬ理屈を云うが、少なくとも徳川時代の末までは、日本人に理屈は禁物であった。



『英国愛蘭近代劇精髓』（1925）

## 2) 第2章 差異の同一化、同一化の差異 —アイルランド劇を「われわれ」のものにする戦略

- ① 目的：1920年代から1930年代にかけての、朝鮮におけるアイルランド劇の流行に、朝鮮とアイルランドの政治状況の類似が関係していることは言を要しないが、ここではその流行が持つもう一つのコンテクストとして、日本の英文学研究・教育におけるアイルランド劇の流行を検証し、その中で朝鮮の留学生たちがどのようにして彼らなりにアイルランド劇を領有していたのかについて考察。

【表1】朝鮮におけるアイルランド劇の上演（Jang+発表者による更新）

上演年	上演団体	上演作（原題）	翻訳・翻案者
1921	同友会巡回演劇団	ダンセイニー卿『燦爛たる門』 ( <i>The Glittering Gate</i> )	金祐鎮訳
1924	土月会	ダンセイニー卿『地藏教の由来』 ( <i>The Gods of the Mountain</i> )	朴勝喜翻案
1925	土月会	ダンセイニー卿『名誉と詩人』 ( <i>Fame and the Poet</i> )	訳者未詳
1925	土月会	シング『谷間影』 ( <i>The Shadow of the Glen</i> )	訳者未詳
1927	Paskyura	グレゴリー夫人『月出』 ( <i>The Rising of the Moon</i> )	延鶴年訳
1929	梨花女子高等学校	ダンセイニー卿『マルマの七神』 ( <i>The Gods of the Mountain</i> )	訳者未詳
1932	劇芸術研究会	グレゴリー夫人『獄門』 ( <i>The Goal Gate</i> )	催珽宇訳
1932	劇芸術研究会	アーヴィン (St. John Ervine) 『寛大な愛人』( <i>The Magnanimous Lover</i> )	張起悌訳
1932	明日劇場	マーレイ (T. C. Murray) 『兄弟：二幕』( <i>Birthright</i> )	佛面鬼翻案
1932	劇芸社（馬山）	シング『海に騎り行く人々』( <i>Riders to the Sea</i> )	訳者未詳
1933	延禧専門学校文友会演劇部	ダンセイニー卿『アラビア人の天幕』 ( <i>The Tents of the Arabs</i> )	異河潤訳
1935	劇芸術研究会	アーヴィン『寛大な愛人』、劇放送 ( <i>The Magnanimous Lover</i> )	柳致真翻案
1941	梨花女子専門学校	シング、 <i>Riders to the Sea</i>	英語公演

- ② 題材：

『英語青年』など、日本英文学におけるアイルランド関係の研究・記事  
(1910-30年代)

金祐鎮など朝鮮人留学生の研究・記事

③ 成果：

A. 朝鮮においてアイルランド劇の〈移動〉に関わった中心人物がすべて日本の英文学の影響下にあったことを確認 → 日本におけるアイルランド文学の流行が朝鮮における流行のひとつの条件であった。

\*【表1】に登場する朝鮮人の東京留学経験

金祐鎮（キム・ウジン）：早稲田大英文科

朴勝喜（パク・スンヒ）：明治大英文科

柳致真（ユ・チジン）：立教大英文科

異河潤（イ・ハユン）：法政大英文科

張起悌（チャン・ギジェ）：法政大英文科

崔珽宇（チェ・ジョンウ）：東京帝大英文科

B. 日本と朝鮮において、アイルランドとの同一化が図られる際に必要とされたそれぞれの戦略を検討。日本においては、「民族性」による同一化が試みられる一方で、アイルランド文学の持つ「政治上」の意味合いを消去しようとする動きがあった。



愛蘭文学の勃興は民族としての覚醒に基くものではあるが、彼のやかましい政治上の自覚とは直接関係はない。

厨川白村、講義「愛蘭文学の近代文芸史に於ける地位」『英語青年』（1920年5月）

私 やあ、あなたは Mr. Yeats ではありませんか？

Yeats （驚いて頬杖をとりながら）はあ、そうです。

私 僕は Tom Fool と云う者で日本政府の費用で愛蘭文学の研究に来たものです。

Yeats [...] 日本政府は愛蘭文学の研究のために態々あなたのような方を派遣（おく）るのですか。頼もしい国ですね。イギリスは一人の学者もあなたの国の文学やお能を研究するために送ることはしません。イギリスは shopkeepers の国です。

（中略）

Yeats [イギリスやアメリカは実利主義に満ちているが] けれども愛蘭は——いまでこそああして政治運動に熱中していますが、..... けれども其もわが愛蘭を真に愛すればこそです——御承知の通りケルト民族特有の美しい国民生活をもっています。近代人は概ね実利主義者ですから我々に二つの世界がある、「見える世界」と「見えない世界」があることを信じません。

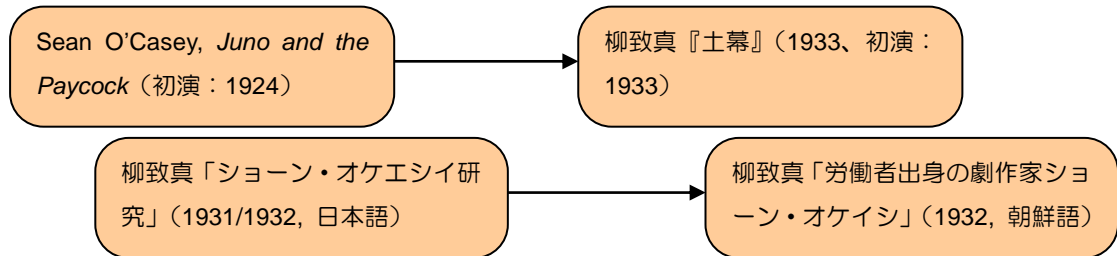
富田義介「An Imaginary Dialogue with W. B. Yeats（夢にイエイツと語る）」『英語青年』（1924年2月）

C. それに対して朝鮮の側では、「政治上」の類似が強調されるなかで、「ケルト」の特性や両国の「民族性」に関する言及がほとんど見られない。→「日鮮同祖論」が支配的であった同時代の文脈との関係していた可能性。

## 6) 第6章 「愛蘭的沈痛」と「朝鮮的沈痛」の間 —オケイシーの『ジュノーと孔雀』と柳致真の『土幕』

① 目的：オケイシーの劇を「愛蘭的沈痛」の劇と規定し、それを「真似」して「朝鮮的沈痛」の劇を作り上げた柳致真による、「愛蘭的沈痛」から「朝鮮的沈痛」への〈移動〉を分析することで、アイルランド劇の〈移動〉が、「われわれ朝鮮人」の構築と関わる様子を具体的に示すこと。

② 題材：



Sean O'Casey (1880-1964)

：ダブリンの貧民街に生まれ、労働者階級に属する。激動期のアイルランドを経験したダブリン民衆の生活に取材した「ダブリン3部作」で、アビー・シアターに新時代を到来させたとされる。イエイツやシング、グレゴリー婦人など、アングロ・アイリッシュの作家たちは、「われわれアイルランド人」というカテゴリーにおいて、危うい位置にいたと言えるが、オケイシーはアングロ・アイリッシュでもなく、ゲール語も理解できたので、そのような批判から比較的に自由でいられた。

### 『ジュノーと孔雀』

：「ダブリン3部作」のひとつ。ダブリンの長屋に住む一家を中心にして、IRB（後のIRA）やストライキなど、政治的な闘争のなかで日常的な生活が犠牲にされている状況を冷笑的に描いた作品。母のジュノーだけが、こうした状況を批判的に眺められる人物として設定されている。

### 『土幕』

：土幕民（他人の土地を無断占拠して、地面を掘り下げるか柱を立てて簡単に築造した家に住む人々、1930年代に急増したとされる）の一家族を中心に、植民地の下層貧民の苦難を描いた劇。

### 柳致真 (ユ・チジン、1905-1974)

：立教大学英文科を卒業し、劇芸術研究会の創立に関わる。以来、植民地朝鮮と独立後の韓国の代表的な劇作家・演出家として活躍。『土幕』以外にも『柳のある村の風景』、『牛』など農民劇を多数発表。1941年以降は、「親日劇」と加担したとされる。



土幕民の実態見学を行う劇芸術研究会の人々→  
(最前列中央が柳致真)

③ 成果：

- A. オケイシーの劇が『土幕』の〈起源〉として位置付けられる課程で、その「愛蘭的沈痛」は「朝鮮的沈痛」の必要によって改変されていた → 「愛蘭的沈痛」と「朝鮮的沈痛」の併置を自然化していた先行研究に対して異議を唱えた。



この『土幕』で作者は、愛蘭の農民作家が愛蘭の農民生活を表出したのと同じような態度と手法で、朝鮮の農民生活を取材表現した。彼が好きなオケイシー氏が […]、訪問記者に、自分は沙翁に私塾したと言ったように、柳致真氏にも、私は愛蘭の農民作家オケイシー氏に私塾したと言う後日があることを願う。

金琬燮（キム・グアンソプ、1906-1977、早稲田大英文科卒、劇芸術研究会メンバー、詩人）  
「劇研第三回公演に際して」『朝鮮日報』（1933年2月、朝鮮語）

これ等の作品〔ダブリン三部作〕は、昔アイルランドの独立革命時代をテーマとして、その間にダブリン貧民街で行はれた色々なエピソードを挿入してあるから、その戦乱の渦中で流血の難儀をまのあたり体験して来た多くの愛蘭人には、限りなくなつかしいものであった。

柳致真の卒業論文（日本語）



柳致真の新聞記事（朝鮮語）



以上の諸作品は、全部愛蘭×××時代を取題して、その間に『ダブリン』の貧民街で行われた様々な喜悲劇を挿入してある。だから、その戦乱の渦中で流血の苦しみと喜びを直接体験して来た全愛蘭国民には、その作品が限りなくなつかしかった。

- B. 先行研究が看過してきた、柳致真自身による日本語の卒業論文から朝鮮語の新聞記事への〈移動〉に注目し、このふたつを比較。→ 柳致真によるオケイシーの〈移動〉は、「愛蘭的沈痛」や「朝鮮的沈痛」を作り上げるプロセスであっただけではなく、「愛蘭的鎮痛」や「朝鮮的鎮痛」を享受する「われわれ朝鮮人」という読者・観客を作り上げるプロセスでもあった。

柳致真「ショーン・オケイシー研究」（1931/1932, 日本語）

柳致真「労働者出身の劇作家ショーン・オケイシ」（1932, 朝鮮語）

「日本人」研究者の削除 → 「外部」を排除  
階級問題の部分を削除 → 「内部」の均質化  
⇒ 「われわれ朝鮮人」の構築

- C. 第2章で述べたように、朝鮮人留学生たちが採用した同一化の戦略が植民地としてアイルランドと朝鮮とを併置することであったとするならば、ここではその併置において両者の差異が隠蔽される過程を示すと同時に、第2章で言及した「自分たちだけの「われわれ」を作り出すこと」がいかに困難であったのかを提示できた。